

# 初期洋画の技術的変遷(Ⅱ)

## —明治初期油彩画の下地組成と石灰質ナノプランクトン—

神 庭 信 幸 佐 藤 時 幸

- 
- |          |          |
|----------|----------|
| 1. はじめに  | 3. 結果と考察 |
| 2. 化石の分析 | 4. 結論    |
- 

### 論文要旨

5種類の明治初期油彩画の下地の中から、炭酸カルシウム型下地の製造地を詳細に検討するために、炭酸カルシウムの層中に見られる化石状微小物質に関する分析を行った。分析方法は、スライドグラスにのせた微量の粉碎した下地を、偏光装置の付いた1500倍の光学顕微鏡により粉末中の微生物化石を観察し、微生物化石の種別の同定と種別間の割合の定量を実施する。分析に用いた試料は、五姓田義松「自画像」(1877)、高橋由一「宮城県庁門前図」(1881)、床次正精「三田製紙所」(1880)の3点の下地である。

分析の結果、化石状微小物質は白亜紀後期カンパニアンの時代に堆積した石灰質ナノプランクトン化石であることが判明し、従って、炭酸カルシウムは白亜(チヨーク)であることが明かとなった。日本国内の同時期の地層からは白亜を産出しないことから、白亜は西ヨーロッパ地域から日本にもたらされたものであろうと推定された。明治初期に日本で制作された油彩画に用いられた下地と、イギリスで制作された油彩画に用いられた下地の成分及び構造が類似することが前報で確認され、更に今回の分析によって両者の下地中に含まれる炭酸カルシウムが日本で産出しない白亜であることを考え合わせると、明治初期には西ヨーロッパ、特にイギリスからカンバスや原材料が輸入されていたと考えられる。